

黄遵憲「人境廬雜詩」について（下）

小 川 恒 男

はじめに

黄遵憲（1848～1905）の『人境廬詩草』（以下『詩草』）¹⁾ 卷二に「人境廬雜詩」と題する五言律詩8首を収める。『鈔本』には同題の作が10首あるが、『詩草』は『鈔本』の其一から其八までをその順序通りに残しており、其九・其十は今「人境廬詩輯補」（以下『輯補』）に見ることができる。1874（同治13）年の春、黄遵憲は自分の家を改修して人境廬と名を改めた。それは廷試に応じるため、都への旅に上る直前、27歳の時のことだった。「人境廬雜詩」という作品群は、8首全体をひとつのシリーズとして捉えて俯瞰してみると、基本的には改修なった我が家のすばらしさを主題とすると見做してよい。その庭園の植物や動物を具体的な素材にうらかな春景を描き、生まれ育った住まいをめぐる様々な事柄に思いを致して、人境廬という我が家こそが自分にとって真に心安まる空間であることを確認するかのようにより返し述べる。しかし、廷試に応じるため、黄遵憲は夏が来る前にはその我が家をいったん離れることになっていた。20歳の春、初めて院試に応じた頃から科挙という制度に早々と見切りを付けていたにも関わらず、一家を維持するための経済的な要求もあり、経世の才に対する自負も充分にあり、加えて世の頹勢をはっきりと認識していた彼は、一族の期待を担い受験のための旅に上るのである。そのため、「人境廬雜詩」の前半4首には、このまま人境廬にあって陶淵明のような「近郊の楽しみ」を楽しみながら隠棲してしまいたいという思いと、多くの人々がその自覚のないままに波乱を迎えつつある世を何とかして救うため政治の場に参画してみたいという望みとの間で、微妙に揺れ動く人物が描かれることになった。その美しい春の佇まいで陶淵明への憧憬の念を深めたのも人境廬ならば、科挙に登第すべく10年にわたって研鑽を積んできた場もまた人境廬だったのである。そのような微妙な揺らぎを描くことにより、人境廬への愛着の情が間接的に、しかし非常に印象的に表出されるのである。

基本的に編年の体裁をとる『詩草』で「～雜詩」という形式の題を持つ作品としては「人境廬雜詩」が最初に現われ、次には1891（光緒17）年から1894（光

緒20) 年にかけて作られた「新嘉坡（シンガポール）³⁾ 雑詩十二首」が巻七に見える。同じく巻七には「養疴雑詩」17首も収めるが、錢仲聯が「『原稿本』無此詩、蓋戊戌回郷以後所補作。」と指摘するとおり、これらは1898（光緒24）年の戊戌政変後、家郷に帰ってからの作のようである。巻八以降には「～雑詩」という詩題⁴⁾は見られない。黄遵憲には「雑感」5首（『詩草』巻一）「海行雑感」14首（同巻四）の「～雑感」、或いは「日本雑事詩」200首の「～雑事詩」といった詩題を採用した作もある。これら「雑」を伴う詩題を持つ作品が、必ずしも一時の作ではないという可能性を残しつつも、いずれも5首以上の連作になっている点は、「雑」字の持つ本来の意味を反映してのことだろう。ただ、詩題というものには詩人の何らかの思い入れが反映されているはずだとするならば、「雑詩」「雑感」「雑事詩」という詩題はそれぞれよく似ているけれども、詩人がその詩題を選択した意図は作品そのものの内容から汲み取ることができるのではないだろうか。

そこで、まず「人境廬雑詩」の内容と構成とについて考察するところから始めようと考え、拙稿「黄遵憲『人境廬雑詩』について（上）」（『中国古典文学研究』第3号 2005年12月、以下「前稿」）では、「人境廬雑詩」前半4首について考察を加えた。内容と詩型から詩人が杜甫の「秦州雑詩」を意識していた可能性に言及し、構成から黄遵憲が「人境廬雑詩」を前半4首と後半4首に大きく二分した上で、2首で一組、即ち其一と其二を一組、其三と其四を別の一組として読まれることを期待したのではないかと論じた。紙幅の都合で其五から其八、及び其九・其十の内容と構成について記述する余裕がなかったので、本稿は前稿を引き継ぐ形で論を進めたい。

1. 「多余恋旧心」と「独坐到微明」

「人境廬雑詩」の後半4首の内容は、前半の4首とは趣をまったく異にする。上にも述べたように、前半4首の作中人物が自分の現在と将来とに向かい合っているのに対し、後半4首の人物は過去に目を向けている。ただ、2首で一組となるよう構成される枠組みは前半4首からそのまま保持されており、次に掲げる其五と其六とが一組である。

人境廬雑詩 其五

紫藤花压架	紫藤 花 架を押し
開落到如今	開落して如今に到る
旧雨傷黄土	旧雨は黄土を傷み

残春悵緑陰	残春は緑陰を悵む ^{うら}
尋香猶惘惘	香りを尋ぬること 猶ほ惘惘 ^{ぼうぼう}
埋玉故深深	玉を埋むること 故 ^{もとよ} り深深
庭下間叉手	庭下に間かに手を叉 ^さ すれば
多余恋旧心	余が旧を恋ふるの心を多からしむ

棚を押さえ付けんばかりに覆っている紫のフジの花は、咲いては散って今日まで歳月を重ねてきた。毎年この季節になると花を咲かせるフジの紫の花が古い記憶が呼び起したのか、「人境廬雜詩」其五には詩人の懐旧の情が語られる。錢仲聯の注が引く古直の箋が「案、此詩蓋有所悼也。(案ずるに、此の詩 蓋し悼む所有るならん。)」と言うように、今は亡き人を思う様子なのだが、それが具体的に誰であったのか、どのような出来事があったのかはまったく語られないまま、ただぼんやりとしたイメージだけが典故を多く用いた表現で重ねられる。頷聯が既に曖昧模糊として分かり難い。第4句「緑陰」は、むかし多少とも心を通わせ合ったことのある女性が、後に見知らぬ男性に嫁ぎ幾人かの子の母になっていた、ということを表わす成語である「緑葉成陰」⁵⁾に基づく。しかし、第3句「旧雨」が杜甫の「秋述」に「常時車馬之客、旧雨来、今雨不来。(常時 車馬の客、旧雨には来たるに、今雨には来たらず。)」とあることから、古い友人をいい、「黄土」、錢仲聯が杜甫「閨夜」詩に「臥龍躍馬終黄土、人事音書漫寂寥。(臥龍 馬を躍らせて黄土に終はり、人事 音書 漫として寂寥たり。)」とあるのを引いて墳墓またはあの世のことだとするのを踏まえると、幼馴染みの女の子はやがてどこか他所へ嫁ぎ、子宝にも恵まれていたのに、不幸にも儚くなってしまった、というような内容になるだろう。

その幼馴染みは黄遵憲の親戚だったのか、墓が人境廬の庭園内のどこかにあったことが頸聯で描かれる。ここでもその表現は典故を踏まえて非常に美しい。第5句「尋香」、よい香りの源を求めて遡ることだが、その香りは第6句「埋玉」から発せられたものである。「埋玉」は『世説新語』傷逝に「庾文康亡、何揚州臨葬云、『埋玉樹箸土中、使人情何能已已』。(庾文康〔庾亮〕 亡じ、何揚州〔何充〕 葬に臨んで云ふ、『玉樹を埋めて土中に箸く、人の情をして何ぞ能く已已たらしめんや』と。)」と見えるように、才能ある人を埋葬すること、またその埋葬された場所をいうが、例えば清・洪昇の戯曲「長生殿」第25齣が楊貴妃の埋葬の場面を描いて「埋玉」と名付けられていることから窺えるように、美しい女性の埋葬をイメージさせる語であり、黄遵憲も恐らくその意味で用いる。今は亡き人を偲び想いに沈みながら歩いてみても、彼女を埋葬した辺りはひっそりと静まりかえるばかりである。

第7句「叉手」は『唐才子伝』温庭筠に「毎試、押官韻、燭下未嘗起草、但籠袖憑几、每一韻一吟而已。場中曰温八吟。又謂八叉手成八韻、名温八叉。(試みるる毎に、官韻を押して、燭下に未だ嘗て起草せず、但だ袖を籠^さして几に憑^たき、一韻毎に一吟するのみ。場中 温八吟と曰ふ。又た八たび手を叉すれば八韻を成せば、温八叉と名づく、と謂ふ。)」とあるのを踏まえ、詩想を練るために腕組みをすること。幼馴染みの女性がなお健在だったならまだしも、もはや「黄土」となってしまっているのであれば、第3句から第6句までに描かれるのは単なる甘酸っぱい記憶と呼べるものなのだろうか。それでも作中の人物は哀しい記憶を言葉で表現してみようと想を練る。人境廬をひとつの舞台として詩人の胸中に去来した喜怒哀楽の情、そして詩人の情を喚起した様々な出来事、それらすべての記憶を引くくめて、人境廬は詩人の心を惹き付けてやまない。「多心」、『呂氏春秋』精諭に「紂雖多心、弗能知矣。(紂 多心と雖も、知る能はず。)」とあり、高誘注に「紂多惡周之心、不能知周必病。(紂 周を惡むの心を多からしむるも、周の必ず病たらんことを知る能はず。)」とある。ここは紂が周を憎惡する心を深めたのとは逆に、愛慕する心がいや増したことを表現するのに用いた。「恋旧」、陶淵明「歸園田居」其一に「羈鳥恋旧林、池魚思故淵。(羈鳥は旧林を恋ひ、池魚は故淵を思ふ。)」とあるのを意識したかもしれない。「歸園田居」が家居に帰ってからの作であり、「人境廬雜詩」が家居を離れようとした時の作であるという状況の違いはあるものの、いずれも自分が本来居るべき場所に対する思いを「恋」字で表現している。「人境廬雜詩」其二でも「唼絮魚行水、銜雛鳥恋巢。(絮を唼^つみて魚は水を行き、雛を銜^くんで鳥は巢を恋ふ。)」と、日常の生活が営まれる場から立ち去りかねている状態を「恋」で表わしていた。

このように「人境廬雜詩」其五には今は亡き人の記憶によって人境廬に引き留められる人物が描かれる。何かしら憚りがあったのかもしれないが、亡き人の姿があまりに曖昧としているため、或いは人境廬を舞台とする虚構を詩人が創作したのではないか、少なくともかなりの程度で誇張の手が加えられているのではないかという印象が残る。では、其六はどうだろうか。

人境廬雜詩 其六

葉葉蕉相擊	葉葉 蕉 相擊ち
叢叢竹自鳴	叢叢 竹 自ずから鳴る
蕭蕭伝雨意	蕭蕭として雨意を伝へ
撼撼誤秋声	撼撼として秋声と誤る
露湿寒蛩寂	露は湿りて 寒蛩 寂たり

枝揺暗鵲驚	枝は揺れて ^{あんじゃく} 暗鵲 驚く
幢幢燈影暗	幢幢 ^{たうたう} として燈影 暗く (『鈔本』作沈沈庭院静)
独坐到微明	独り坐して微明に到る (『鈔本』作坐到夜三更)

其六では、夜ひとり部屋の中に坐ってももの思う人物が登場する。何をもの思っているのかは示されない。詩中に「風」字は一度も現われないが、一篇の主役は雨の到来を知らせる風である。芭蕉の大きな葉が風に揺れてぶつかり合い、そここの竹林から風が吹き抜ける音が聞こえてくる。第3句「蕭蕭」、ここは風の音。「雨意」は雨が降りそうな気配。蘇軾「真興寺閣禱雨」詩に、「雲陰黯黯將嘘遍、雨意昏昏欲醞成。(雲陰^{あむあむ} 黯黯として將に嘘遍 [大きく息を吹き出す。ここは風を吹かせる様をいう。]) せんとし、雨意 昏昏として醞成せんと欲す。))」と見える。第4句「撼撼」、葉の散るさま。盧諶「時興詩」(『文選』卷三十)に、「撼撼芳葉零、樂樂芬華落。(撼撼として芳葉^お 零ち、樂樂として芬華 落つ。))」とあり、呂延濟注に「撼撼、葉落声也。」とある。「人境廬雜詩」其一の冒頭にも「春風吹庭樹、樹樹若為秋。(春風 庭樹を吹き、樹々^{いか} 若為でか秋ならん。))」と春風に吹かれているにも関わらず樹木が秋の様相を呈するというモチーフが用いられていたが、ここでも「誤秋声⁷⁾」と、雨を告げる風に吹き散らされた葉の音が恰も秋であるかのようだ、と詠う。このモチーフを承けて、頸聯は唐・戴叔倫「客夜与故人偶集(客夜 故人と偶たま集ふ)」詩に「風枝驚暗鵲、露草覆寒蛩。(風枝は暗鵲を驚かせ、露草は寒蛩を覆ふ。))」と見える秋景の表現をほぼそのまま踏まえる。戴叔倫が「風枝」の語を用いて枝を揺らす主体が風であることを明示するのに対し、黄遵憲は敢えて「風」字を用いるのを避けたのだろう。このような陰鬱な雰囲気の中で作中の人物はいったいどのような思いの中に沈み込んでいるのだろうか。第7句「幢幢燈影暗」が元稹「聞樂天授江州司馬」詩の「殘燈無焰影幢幢、此夕聞君謫九江。(殘燈 焰無くして 影 幢幢、此の夕べ 君の九江に謫せらるるを聞く。))」を踏まえることからすると、誰か遠く離れた友人に思いを馳せているのかもしれない。しかし、『鈔本』が尾聯を「沈沈庭院静、坐到夜三更。(沈沈として 庭院 静かに、坐して到る 夜三更。))」に作り、必ずしも人物が友人を思っている姿を描いていたわけではなく、「幢幢」がゆらゆら揺れ動く様を表わすことから、ここは「風」字を用いることなく屋内の灯火が風に揺れる様子を描こうとしたものと考えた方がよいだろう。やはり一篇の主役は「風」なのである。

2. 「人境廬雜詩」其五・其六と『文選』「雜詩」

「人境廬雜詩」其五はその人の死によって最早逢うことの叶わなくなった女性の記憶をたどりながら、人境廬の庭園内のひとり徘徊する人物を典故表現を多用して描く。其六は部屋の中に坐って一晩中まんじりともせず庭を吹き抜ける風に耳を傾けながら、何かしらもの思いに沈む人物を、第1句から4句までの冒頭2字をいずれも疊語で揃え、しかも最後まで「風」字の使用を敢えて避けるよう工夫を凝らして描き出す。上にも言及したように、其五と其六とは、人境廬という空間の中で何如ともし難い孤独を抱える人物を造形する、という点で関連付けがなされている。しかし、このような人物造形は「人境廬雜詩」前半4首、即ち其一から其四までに描かれる人物の造形と比較した時、それほど大きくはないが違いがあるように感じられる。前半4首の主人公は、隠棲か仕官かという「人境廬雜詩」を作った時点で黄遵憲自身が直面していたであろう現実の具体的な懊悩を抱えた、詩人自身の分身として造形されている。一方、この其五と其六とでは中国古典詩の伝統を襲うモチーフが人境廬という場を舞台として展開されるように見え、作中人物の個性という点に於いて存在感がやや稀薄であるように思われるからである。

前稿でも触れたように、「人境廬」の語は、言うまでもなく、陶淵明の「飲酒」其五に、

結廬在人境	廬を結んで人境に在り
而無車馬喧	而も車馬の ^{かまびす} 喧 しき無し
問君何能爾	君に問ふ 何ぞ能く ^{しか} 爾ると
心遠地自偏	心 遠ければ 地 自づから偏なり

とあるのに基づく。ところで、陶淵明のこの作は彼の別集だけでなく『文選』卷三十にも採録されている。周知の如く、『文選』には「雜詩」という類目が立てられ、卷二九に「雜詩 上」、卷三十に「雜詩 下」を収め、「飲酒」其五は「雜詩 下」に見える。黄遵憲がこのことを念頭に置いて「人境廬雜詩」という篇題を選択したのかどうかは判然としない。ただ、其五・其六の内容からすると、或いは『文選』の「雜詩」を意識していたかもしれないと考えられる。

『文選』中の類目としての「雜詩」、及び個々の作品の篇題としての「雜詩」については、既に森瀬壽三氏に「雜詩の性格について」という詳細な論考がある。氏は従来⁹⁾の説を踏まえつつ、『文選』における分類としての雜詩は、卷二九に計六十五首、卷三十に計二十八首、合計九十三首採録されている。

そして、これらの詩群の冒頭に置かれているのが、ほかならぬ『古詩十九首』と李陵・蘇武の詩群である。……（中略）……。少し割り切った言い方をすれば、『文選』における『雜詩』は、これら二つの詩群のヴァリエーションとして考えることができるといえる。」とし、『文選』における「雜詩」が「離人離群」の詩という性格を持つことを指摘する。

「古詩十九首」や李陵・蘇武の詩は多く生別離を描くのに対し、「人境廬雜詩」其五は、虚構なのかもしれないが、死別離を描く。しかし、いずれにしても作中人物は或いは展転として眠れぬ夜を過ごし、或いは眠れぬまま辺りをひとり徘徊する。例えば、

雜詩二首 其一 曹丕

漫漫秋夜長	漫漫として 秋夜 長く
烈烈北風涼	烈烈として 北風 涼し
展転不能寐	展転として 寐ぬる能はず
披衣起彷徨	衣を披て起ちて彷徨す
彷徨忽已久	彷徨すること 忽ち已に久しく
白露沾我裳	白露 我が裳を 沾す
俯視清水波	俯しては清水の波を視
仰看明月光	仰いでは明月の光を見る
天漢回西流	天漢 廻りて西に流れ
三五正從横	三五 正に従 横たり
草虫鳴何悲	草虫 鳴くこと何ぞ悲しき
孤鴈独南翔	孤鴈 独り南に翔る
鬱鬱多悲思	鬱鬱として悲思 多く
綿綿思故郷	綿綿として故郷を思ふ
願飛安得翼	飛ばんことを願ふも安くにか翼を得ん
欲濟河無梁	濟らんと欲するも河に梁無し
向風長歎息	風に向かひて長く歎息し
断絶我中腸	我が中腸を断絶せんとす

『文選』卷二九「雜詩 上」に収める曹丕のこの作は、「人境廬雜詩」が家居にあって晩春を送る人物を描くのととは逆に、秋の夜、故郷を遠く離れ帰ろうにも容易には帰ることのできない地にある人物の孤独を詠う。しかし、「人境廬雜詩」其五・其六に描かれる人物の姿は、「離人離群」の情のために「展転として寐ぬる能はず、衣を披て起ちて彷徨す」る人々の末裔たるに相應しい。其

六の作中人物はまさしく「風に向かひて長く歎息し」ているのである。

1874（同治13）年の春、家居にあつて「人境廬雜詩」を作った時、彼を取り囲む様々な状況と対峙することによって生じた黄遵憲自身の懊悩は、彼の分身を主人公として設定する作品の其一から其四までの前半4首に見出すことができる。一方、其五と其六とは中国古典詩の伝統的なモチーフの一つを継承しており、他の誰でもなく、その時その場に居合わせることになってしまった黄遵憲だけが抱き得たような情感を描いたようには見做し得ない。しかし、このような作品によって逆に黄遵憲という一箇の人間が人境廬という空間で確かに生きて若い日々を送ってきたのだということを表現し得ているように思われる。というのも、彼はもっと長い歳月を人境廬で過ごしてきたのであり、人境廬にまつわる彼の思い出は尽きることのないほど豊かであつたに違いない。その忘れることのできないひとつひとつの記憶を、伝統的なモチーフを踏襲し典型を描くことで、結晶させることに成功しているように思われるからである。

3. 「有弟住東頭」と「楊梁諸子好」

「人境廬雜詩」其七と其八との関連性は比較的容易に見出せる。一方は肉親の情を詠い、一方は友人の情を詠う。其六の末句で「独坐到微明」と夜明けを迎えた場面を承け、其七は朝日が昇っていく様から始まる。

人境廬雜詩 其七

初日照高楼	初日 高楼を照らし（『鈔本』作微雨止復作）
遲遲樹影収	遲遲として樹影を収む（『鈔本』作疏烟淡不流）
苔痕縁壁漫	苔痕 壁に縁りて漫に（漫、『鈔本』作上）
花氣到簾留	花氣 簾に到りて留まる（到、『鈔本』作隔）
春軟鷄同粥	春 軟らくして 鷄 同に粥として
	（『鈔本』作虚室白無影）
風和鵲亦柔	風 和みて 鵲も亦た柔らかし
	（『鈔本』作孤燈紅欲愁）
書声牆外過	書声 牆外を過ぐ
有弟住東頭	弟有り 東頭に住む

首聯は『鈔本』が「微雨 止みて復た作り、疏烟 淡くして流れず。」として、細かな雨が降ってはやみ降ってはやみ、淡々とした霞を吹き流す風もない、動きを欠くやや沈鬱な薄暗い情景を作り出していたのに対し、現行本ではやはり

無音ではあるが、眩しい光を放つ朝日がゆっくりと昇っていく動きを加え、清澄で明るい印象が与えられている。昇ったばかりの太陽がたかどのを照らし、春の日が次第に高くなり樹木の影が短くなっていく。「初日」、唐・常建「題破山寺後禪院（破山寺〔江蘇省常熟〕の後の禪院に題す）」詩に、「清晨入古寺、初日照高林。（清晨 古寺に入れば、初日 高林を照らす。）」と見え、爽やかな朝のイメージである。「照高殿」、曹植「七哀詩」（『文選』巻23所収）に「明月照高楼、流光正徘徊。（明月高楼を照らし、流光 正に徘徊す。）」とあって、孤高の様を描くのに用いられる。「遅遅」、春日のゆっくりとした動きをいう。『詩経』豳風・七月に「春日遅遅、采芡祁祁。（春日 遅遅たり、芡を采ること祁祁たり。）」とあり、毛伝に「遅遅、舒緩也。」と見える。「樹影収」、分かり難いが、陸游の「六月十四日、微雨、極涼」詩に、「雲来樹収影、雨過土生香。（雲 来たりて 樹 影を収め、雨 過ぎりて 土 香を生ず。）」とあるのから推すと、陸游の作の方が雲が日射しを遮って樹木の影がなくなってしまうのを表現するのに対し、ここは朝日が次第に高くなることによって樹木の影が次第に短くなっていく様を描くのではないかと解せられるのではないか。苔の痕が壁際にまで広がり、花の香りがカーテンの辺りにまで漂う。春は温かくニワトリたちはみな従順でおとなしく、風も穏やかにカササギもおとなしい。「鷄同粥」、韓愈「琴操十首、雉朝飛操」に、「随飛随啄、羣雌粥粥。（随ひて飛び随ひて 啄む、羣雌 粥粥たり。）」とあり、朱熹の『考異』は『礼記』儒行篇の「粥粥若無能也。（粥粥として能無きが若きなり。）」を引き、また或るひとの「粥」に作るべしとの説を引く。『礼記』の孔穎達疏には『粥粥若無能也』者、粥粥是柔弱專愚之貌、言形貌粥粥然、如無所能也。（『粥粥として能無きが若きなり。』とは、粥粥は是れ柔弱專愚の貌、形貌 粥粥然として、能くする所無きが如きなるを言ふなり。）とある。また、『説文解字』二篇上・𠂔部に「𠂔、呼雞重言之。从𠂔州声。讀若祝。（𠂔、雞を呼んで重ねて之れを言ふ。𠂔に从ひ州の声。読んで祝の若し。）」とある。第6句、唐・司空図「与李生論詩書」に「夜短猿悲滅、風和鵲喜靈。（夜 短くして 猿 滅するを悲しみ、風 和して 鵲 靈なるを喜ぶ。）」と見える。頸聯、『鈔本』は首聯を承けて「虚室 白くして影無く、孤燈 紅にして愁へんと欲す。」に作り、他に誰もいない部屋の中、一晚中たった1本のロウソクのポツンとした光を頼りにももの思いに耽る孤独な様を描く。このように、『鈔本』から現行本への改作は、やや暗い色調から明るいイメージへという変更を加えたものである。『鈔本』の色調は「人境廬雜詩」の前半4首、其一から其四までのトーンを引きずっているようだが、現行本の其五・其六は敢えて差別化を図る改作が施されたのではないだろうか。

しかし、この「人境廬雜詩」其七の眼目は尾聯にある。壁の向こうを書物を読む声が通り過ぎていく。それは我が陸雲とも言うべき弟の声である。第8句「住東頭」、『世説新語』賞誉に「蔡司徒在洛、見陸機兄弟住参佐廨中、三間瓦屋、士龍住東頭、士衡住西頭。（蔡司徒〔蔡謨〕 洛に在り、陸機兄弟の参佐〔属僚〕の廨〔官舎〕中、三間の瓦屋に住むを見る。士龍〔陸雲（262～303）の字〕は東頭に住み、士衡〔陸機（261～303）の字〕は西頭に住む。）」とあるのに基づく。黄遵憲には遵模（字は采汀、1849～1916）、遵路（字は公望、1855～1889）、遵楷（字は牖達、1858～1917）といった弟たちがいたが、ここは黄遵路を指すの⁽¹⁰⁾だろう。

現行の『詩草』では次の其八が「人境廬雜詩」の掉尾を飾る。

人境廬雜詩 其八

耐冷齋頭客	耐冷齋頭の客
鰥魚不寐余	鰥魚 寐ねざるの余 ^{のち}
知君長独坐	知る 君の長に独坐して ^{つね}
念我近何如	私の近ごろ何如なるかを念ふを
哀樂中年感	哀樂 中年の感
艱難遠道書	艱難 遠道の書
楊梁諸子好	楊・梁 諸子 好し
蹤跡亦蕭疏	蹤跡も亦た蕭疏たり

第1句「耐冷齋」には「西寧学署齋名、時詩五客此。（西寧学署の齋の名、時に詩五 此に客たり）。」との黄遵憲の自注がある。西寧は現在の青海省西寧市。学署は清代、地方に置かれた学校。詩五は梁居実（1843～1911）の字。黄遵憲の遠い親戚に当たり、黄遵憲と同じく広東省嘉應州（梅州市）の人。『年譜』同治9（1870）年の条に、「梁詩五（居実）之西寧、先生有詩送別。」とあり、『輯補』に庚午「詩五大舅之西寧詩以誌別」4首を収める。翌10年の条には「梁詩五自西寧歸相見、先生有詩。」とあり、『輯補』に「詩五大舅歸自西寧相見有詩」4首を収める。第2句「鰥魚」、『釈名』「釈親属」に「無妻曰鰥。鰥昆也。昆明也。愁悵不寐、目恒鰥鰥然也。故其字從魚、魚目恒不閉者也。

（妻無きを鰥と曰ふ。鰥は昆なり。昆は明なり。愁悵^{しういふ}して寐ねず、目 恒に鰥鰥然たるなり。故に其の字 魚に従ふ、魚目 恒に閉ぢざればなり。）」という。『人境廬詩草』巻一に「為詩五悼亡詩」を収め、その篇次から梁居実の妻の死は1870（同治9）年のことだったようであるから、首聯は梁居実が妻を亡くしてすぐに遠く西寧へ赴任しなければならなかったことを詠う。この「人

境廬雜詩」其八が1874（同治13）年の時点から3年ほど前に遡った時期を回想しての作であることが分かる。頸聯は王士禎「寄汪苕文堯峰隱居四首（汪苕文堯峰隱居〔汪琬、字は苕文、晩に堯峰と号す。〕に寄す、四首）」其三に、「哀樂中年事、艱難遠道書。（哀樂は中年の事、艱難は遠道の書。）」とあるのをほぼそのまま用いる。「哀樂中年感」は『世說新語』言語に、「謝太傅語王右軍曰、『中年傷於哀樂、与親友別輒作数日惡』。（謝太傅〔謝安〕 王右軍〔王羲之〕に語^てて曰く、『中年 哀樂に傷む。親友と別るれば、輒ち数日の惡を作す』と。」とあるのに拠る。第7句「楊梁」、錢仲聯は楊我穀と梁居実、梁国瑞のことであると注する。楊我穀は黄遵憲の同学。梁国瑞、字は輯五、広東省嘉応州の人。しかし、一篇は梁居実との友情を主題とするのであって、楊我穀、梁国瑞の名を強いて挙げる必要はなさそうである。第8句の「蹤跡」が双声であるのに対し、第7句に「楊梁」という疊韻語を配するため、わざわざ楊我穀の姓を加えたに過ぎない。だが、この詩が梁居実への親愛の情を描くにしても、第1句から第7句までには人境廬との関連性が見えてこない。第8句に至ってようやく人境廬との接点が現われる。「蹤跡」、本来は足跡の意であるから、ここは友人たちがこの人境廬を尋ねてくれることも近頃は稀になってしまったことを述べるのだろう。自分も友人たちもまだ若かった頃は親しくお互いの家を訪問し合うこともできたが、それぞれが年齢を加え「中年」となってしまった今は皆がそれなりに忙しく、なかなか家を訪ねる機会が得られなくなったのである。「人境廬雜詩」という詩題の下に梁居実との友情を描く際に、敢えてこのような構成を選択したのだと考えてよいと思う。

おわりに

「人境廬雜詩」其七・其八は2首一組で親故の情を描く。前稿で述べたような其一から其四までと杜甫「秦州雜詩」との関わり、この稿で言及した其五・其六と『文選』「雜詩」との関わりと比較してみた時、この其七・其八には黄遵憲以前の詩人たちの手になる「雜詩」との繋がりを見出し難く感じる。けれども、人境廬という場で営まれてきた日々の暮しを振り返ってみた時、黄遵憲にとって肉親と友人とは欠くことのできない存在だった。そこで、「人境廬雜詩」の「雜詩」が、人境廬にまつわる様々な事どもを素材とし、人境廬という場に置かれた人物の胸中を去来する多様な想いを詠出することを主題とする作品群という意味を持つようになったのである。はじめに述べたように、彼には「人境廬雜詩」の他にも「新嘉坡（シンガポール）雜詩十二首」（『詩草』巻七）、後年の補作として「養疴雜詩」17首（同巻七）がある。前者は12首とも

五言律詩の詩型でシンガポールにまつわる様々な事物を詠い、その時シンガポールという場に身を置いていた作中人物の情感や想念を描いており、内容的には「香港感懷」10首（巻一）と似た雰囲気漂浮を漂わせる。後者はいずれも七言絶句であり、病氣療養の間に胸中に去来したいろいろな事柄を主題とする作品群となっている。

前稿の冒頭に現行の『詩草』に収録されていない「人境廬雜詩」其十を掲げた。其十はどちらかと言えば前半4首と内容を同じくしていた。其九は次のような作である。

人境廬雜詩 其九

扶筇訪花柳	筇 きょう を扶 つゑ きて花柳を訪ね
偶一過隣家	偶一 隣家を過ぎる
高芋如人立	高芋は人の如く立ち
疏藤当壁遮	疏藤は壁に当たりて遮らる
絮譚十年乱	絮譚す 十年の乱
苦問長官衙	苦問す 長官の衙
春水池塘満	春水 池塘に満ち
時聞閣閣蛙	時に閣閣たる蛙を聞く

杖をついて花や柳を愛でるために散歩に出掛け、偶々隣家の前を過ぎた。「扶筇」、黄遵憲はこの時27歳であるから、実際にはまだ杖をついて歩くほどでなかっただろうが、「遊豊湖三首」其二（『詩草』巻一）にも「扶筇朝看花、入夜不一坐。（筇を扶きて朝に花を看、夜に入るも一たびも坐せず。）」という。背の高い芋はヒトのようにすっと立ち、疎らな藤は壁より先には蔓を伸ばせないでいる。「絮譚」、絮談に同じく、くどくど喋ること。「十年乱」は太平天国の乱を指すのだろう。1865（同治4）年10月、太平天国の残党が嘉応州を襲い、黄遵憲は葉氏と結婚して僅か数日後、一家全員命からがら脱出できたという事件があった。「苦問」、あれこれ問い質すこと。中央から派遣されて来た役人についていろいろ尋ねたのだろう。蘇軾の惠州期の作とされる「寄高令」詩に、「満地春風掃落花、幾番曾醉長官衙。（満地の春風 落花を掃ひ、幾番か曾て酔ふ 長官の衙。）」と見える。季節は春、池にも水がいっぱいに溢れている。と、そこにケロケロと蛙の鳴き声が聞こえてきた。「閣閣」はカエルの鳴き声。陸游「山園雜詠」其二に、「科斗已成蛙閣閣、桜桃初結子青青。（科斗 已に成りて 蛙 閣閣、桜桃 初めて結び 子 青青。）」とある。作品は、散策のついでに隣人と世間話に花を咲かせるという、のんびりと隠者の生

活を楽しむ人物を描いているかのように見える。ただ、韓愈の「雑詩四首」其四に、

雑詩四首 其四 韓愈	
雀鳴朝營食	雀は鳴いて朝に食を営み
鳩鳴暮覓羣	鳩は鳴いて暮れに群 ^{もと} を覓む
独有知時鶴	独り時を知るの鶴有り
雖鳴不縁身	鳴くと雖も身に縁 ^よ らず
暗蟬終不鳴	暗 ^{いんぜん} 蟬 ^{つひ} は終に鳴かず
有抱不列陳	抱く有るも列陳せず
蛙黽鳴無謂	蛙 ^{あばう} 黽 ^{かふかふ} は鳴くも謂はれ無く
閤閤祇乱人	閤 ^た 閤として祇だ人を乱るのみ

とあるのを踏まえるのであれば、やはり作中人物を思い悩ませる何ものかが心の中に蟠っていると考えるべきなのかもしれない。韓愈の作が「雑詩」という詩題を持つだけに、こちらの解釈の方が妥当であろうか。

其九の作中人物が隣人との昔話に花を咲かせるというような「近郊の楽しみ」を味わいながらも、カエルの鳴き声に漠然たる不安や不満を搔き立てられる姿は、其十と同様に「人境廬雑詩」前半4首の系譜に連なっており、特に其一と通じ合うものがある。しかし、内容的に其十との関連性は薄く、2首一組という「人境廬雑詩」全体の構想からは外れるだろうし、其九と其十とを加えると前半4首・後半4首という構成からも逸脱してしまう。現行の『詩草』から其九と其十の2首が削られた理由もこの辺にあると考えられる。

以上に述べたように、「人境廬雑詩」の「雑詩」は、杜甫の「秦州雑詩」や『文選』の「雑詩」、或いは韓愈の「雑詩四首」其四など、この詩題を持つ多くの先行作品を意識しつつ、人境廬にまつわる様々な事物を素材にして、作中人物の心の中を表出するという意味合いで用いられていた。その意味では「詠懷¹²⁾」という詩題と似通った部分があるかもしれない。

ただ、ここで注目しておきたいのは、黄遵憲の詩を作るという行為に対する態度である。『詩草』に収めるすべての作品がそうであるとは言えないだろうが、この「人境廬雑詩」など幾つかの作品は内容よりも詩題の方が先に立つ形で作品が構想されているように見える。詩によって表現したい何ものかを詩人が心の中にわだかまらせているのは当然であるにしても、それがそのまま言葉によって紡ぎ出されるより前に、詩題を選択し、その詩題に合わせる形で作品全体が構想される、黄遵憲の作品の一部分はそうのように作られているのではな

いだろうか。「人境廬雜詩」の場合は、改修によって住まいの名を「人境廬」と改めたのを機に、思ったこと、感じたこと、考えたこと、思い出したことなどを詩によって表現しようとした時、まず「人境廬雜詩」という詩題が設けられ、その後で内容が構想されたように見えるということである。後に現行の『詩草』を編纂する際には、その構想がより構造的に組み立てられることになり、前後半4首ずつ、2首一組という体裁に収斂し、其九と其十とが削除されたのだらう。

このように、黄遵憲という詩人は、詩を作ることそのものを楽しむというよりも、どのような詩を作ろうかとあれこれ構想を練ることを楽しむ詩人であったように思われる。そのため、彼の作品にあっては彼自身の分身とおぼしき人物であっても、まるで物語中の人物であるかのように造形の手が加えられている場合がある。「人境廬雜詩」でも、作中人物は隱棲と仕官との間で深刻に思い悩んでいるけれども、黄遵憲は既に廷試を受験することに意を決しており、必ずしも身を裂くような懊悩に陥っていたというわけではないのだらう。彼にとって詩を作るという行為は趣味的であるとも言えるのではないだろうか。

彼の詩集である『人境廬詩草』の「詩草」の語は、晩唐期から詩の草稿という意味¹³⁾で用いられていたのが、やがて明の頃から詩集の名称としても用いられるようになったもののようである¹⁴⁾。黄遵憲が自分の詩集を編纂して「詩草」と名付けたのには、自分の作は草稿程度のものでしかないという謙遜の意を込めたかったのだらう。或いはそのような名付け方からは、治国平天下、經世済民を事とする儒者であろうとして、詩作という行為そのものは自分の「余技」でしかないと位置付けた、黄遵憲の矜持を酌み取るべきなのかもしれない。

(注)

1) 現在のところ、容易に入手できる黄遵憲の詩文のテキストには、

a 国家清史編纂委員会・文献叢刊『黄遵憲全集（上・下）』（陳鍾編 中華書局 2005）

b 『黄遵憲集』上・下巻（吳振清他編校整理 天津人民出版社 2003）

がある。aには『人境廬集外詩輯』を更に拡充させた「人境廬詩輯補」を収め、bにも同様に「補遺」を収める。『人境廬詩草』については次の2種がある。

c 『人境廬詩草箋注』（錢仲聯箋注 古典文学出版社 1957、以下『旧箋注』）

d 『人境廬詩草箋注』（錢仲聯箋注 上海古籍出版 1981、以下『箋注』）

本稿ではaを底本とし、b・c・dを参考にした。『人境廬詩草』の書誌学的な概要についてはc・dに附録として掲載された錢仲聯の「夢苕盦詩話」に詳しい。それによると、『人境廬詩草』は黄遵憲が生前に何度か編集整理の手を既に加えていたので、現行

の『人境廬詩草』とは異なる稿本が何種類か存在したらしい。現在北京大学図書館が所蔵する四巻鈔本『人境廬詩草』（c・dでは『鈔本』と略称される。）は周作人が北京の古書店で購入したものらしく、現行『人境廬詩草』の巻一から巻六までに該当するが、異同が大変多い。北京大学中文系近代詩研究小組が編纂した『人境廬集外詩輯』はこの『鈔本』を基礎にしている。この他に黄遵憲の門人である楊徽五が所有していた巻五から巻八までの原稿本（c・dでは『原稿本』）があり、これにも現行『人境廬詩草』との異同がある。

- 2) 拙稿「黄遵憲『遊豊湖』について」（『中国中世文学研究』第45・46合併号 2004年10月）、「3年ごとの豊湖 —黄遵憲『遊豊湖』『庚午六月重到豊湖誌感』—」（『中国古典文学研究』第2号 2004年12月）参照。
- 3) 錢仲聯注に「『原稿本』凡十六首、此刪存十二首、已刪去之四首今收入『人境廬集外詩輯』中。」という。
- 4) 錢仲聯注に、「『鈔本』無此詩、『新民叢報』第二十七号載此詩凡十六首。此存十四首。其第七・九首今収『人境廬集外詩輯』中。」という。『新民叢報』は黄遵憲の盟友とも言うべき梁啓超が中心となって1902年に横浜で発行した半月刊の雑誌。
- 5) この故事成語は、宋・計有功『唐詩紀事』杜牧に、「牧佐宣城幕、遊湖州。刺史崔君張水戲、使州人畢觀。令牧間行閱奇麗、得垂髻者十余歳。後十四年牧刺湖州、其人已嫁生子矣。乃悵而為詩曰、『自是尋春去校遲、不須惆悵怨芳時。狂風落尽深紅色、綠葉成陰子滿枝。』」（牧 宣城の幕に佐たりしとき、湖州に遊ぶ。刺史崔君 水戲を張り、州人をして ^{ことごと}畢く觀しめ、牧をして ^{ひそ}間かに奇麗を閱しむるに、^{すいてう}垂髻なる者の十余歳なるを得たり。後十四年 牧 湖州に刺たり、其の人 已に嫁して子を生めり。乃ち ^{うれ}悵ひて詩を為りて曰く、『自ずからはれ春を尋ねて去ること校遅く、惆悵として芳時を怨むを ^{もち}須ひず。狂風 落とし尽くす 深紅の色、綠葉 陰を成して 子 枝に満つ』と。」と見える記事に拠る。杜牧にまつわるこの記事は『太平広記』婦人部四に引く晚唐・高彦休『唐闕史』や元・辛文房『唐才子伝』などにも見える。記事中の詩は『樊川文集外集』に「歎花」と題して収めるが、字句に異同があり、「自恨尋芳到已遲、往年曾見未開時。如今風擺花狼籍、綠葉成陰子滿枝。（自ら恨む 芳を尋ねて 到ること ^{はなは}已だ遅きを、往年曾て見る 未だ開かざるの時。如今 風擺いて 花狼籍たり、綠葉 陰を成して 子 枝に満つ。」に作る。『杜牧詩選』（松浦友久・植木久行編訳 岩波文庫 2004）は『唐闕史』の記事を引きつつ、

『全唐詩』五二七には、「悵詩」と題して収める。「歎花」詩とこの「悵詩」では、第四句を除いて文字の異同が多いが、やはり同一の作品であろう。（『全唐詩』五二四には「歎花」詩を収める。）この逸 ^{エピソード}話自体は、杜牧の伝記等と矛盾する点を含んでおり、「歎花」詩と風流才子の評判を結びつけた、後人の付 ^{フィクション}会らしい。と注する。

6) 語は唐・段成式『酉陽雜俎』玉格に、「貝丘西有玉女山。伝云、晋太始中、北海蓬球、字伯堅、入山伐木。忽覺異香、遂遡風尋之、至此山。廓然宮殿盤鬱、樓台博敞。球入門窺之、見五株玉樹。復稍前、有四婦人、端妙絕世、自彈碁於堂上、見球俱驚起、謂球曰、『蓬君何故得來』。球曰、『尋香而至』。遂復還戲。一小者便上樓彈琴、留戲者呼之曰、『元暉、何謂獨升樓』。球樹下立、覺少饑、乃以舌舐葉上垂露。俄然有一女乘鶴而至、逆恚曰、『玉華汝等、何故有此俗人。王母即令王方平行諸仙室』。球懼而出門、迴顧、忽然不見。至家乃是建平中。其旧居間舍、皆為墟墓矣。(貝丘〔唐代の県名。山東省清平県〕に西に玉女山有り。伝に云ふ、晋の太始(「泰始」の表記が一般的。265～274)中、北海〔唐の郡名。山東省益都県〕の蓬球、字は伯堅、山に入りて木を伐る。忽ち異香を覚え、遂に風を遡りて之れを尋ね、此の山に至る。廓然として宮殿 盤鬱し、樓台^{はくしやう}博^敞 [広々としたさま]す。球 門に入りて之れを窺ふに、五株の玉樹を見る。復た稍前めば、四婦人有り、端妙絶世、自ら碁を堂上に弾く、球を見て俱に驚き^た起ち、球に謂ひて曰く、『蓬君 何の故にか來たるを得るか』と。球 曰く、『香りを尋ねて至れり』と。遂に復還^また戲る。一小者 便ち樓に上りて琴を弾じ、留まりて戲る者 之れを呼びて曰く、『元暉^{なんすれ}、何 謂^{ぜつし}ぞ独り樓に升るや』と。球 樹下に立ち、少しく饑うるを覚え、乃ち以て葉上の垂露を舌舐^{ぜつし}す。俄然 一女の鶴に乗りて至る有り、逆^{ぎやくい}恚して曰く、『玉華 汝等、何の故か此の俗人有る。王母 即ち王方平をして諸れを仙室^こに行かしめん』と。球 懼れて門を出で、迴顧すれば、忽然として見えず。家に至れば乃ち是れ建平(399～405)中なり。其の旧居間舍〔居室〕、皆な墟墓と為れり。」とあるのに拠る。

7) 宋・張侃「宿彌陀興福院遇詩僧妙寧(彌陀興福院に宿り、詩僧妙寧に遇ふ)」詩に、「今宵僧院借牀眠、風誤秋声在枕辺。(今宵 僧院 牀を借りて眠り、風 秋声と誤りて枕辺に在り。)」という。

8) 戴叔倫の「客夜与故人偶集」詩は『全唐詩』に拠った。首聯に「天秋月又滿、城闕夜千重。(天 秋にして 月 又た満ち、城闕 夜 千重。)」とあり、秋景を描くのだということが分かる。この五律は『唐詩三百首』にも収めるが、詩題を「江郷故人偶集客舍」とし、「寒蛩」を「寒虫」に作る。

9) 森瀬壽三氏「雑詩の性格について」(『唐詩新攷』 関西大学出版部 1998、原載「関西大学文学論集」第34巻第1号 1984)に、「近年における『雑詩』の性格に関する文献として次のものがある。」として、

一海知義「西晋の詩人張協について」(『中國文學報』第七冊)

長谷川滋成「『雑詩』という意味」(『広島大学中国中世文学研究』2)

後藤秋正「『雑詩』と魏晋の詩人達」(笠間書院『中国文学の世界』第五集)

斯波六郎「雑詩」(平凡社『世界百科大辞典』)

一海知義「雑詩について」(口頭発表要旨『日本中國學會報』第十集)

を挙げる。

- 10) 『人境廬詩草』卷二は巻頭に「寄四弟」2首を載せ、その直後に「人境廬雜詩」8首を収める。「寄四弟」の題下には錢仲聯が「案、公度從弟由甫曰、『此乃寄遵路者。公度同母弟三人、依次序、公度長、遵謨第二、遵路第三、遵楷第四。稱遵路為四弟者、係照同祖父兄弟排列。遵路、字公望、州庠生。』（案ずるに、公度〔黃遵憲の字〕の從弟 由甫 曰く、『此れ乃ち遵路に寄する者なり。公度の同母弟 三人、次序に依れば、公度は長たり、遵謨〔字は采汀、1849～1916〕は第二、遵路〔字は公望、1855～1889〕は第三、遵楷〔字は牖達、1858～1917〕は第四。遵路を稱して四弟と為すは、祖父を同じうするの兄弟の排列に照らすに係る。遵路、字は公望、州庠生たり』と。」との案語を附す。「寄四弟」2首は、廷試に応じるための家居を離れるに臨み、黃遵憲が弟の遵路に宛てて「人生歡聚時、何知苦別離。（人生 歡^{くわん}聚の時、何ぞ知らん 別離に苦しまんことを。）」と別れの辛さを述べる。この年、黃遵路は州学に入ったばかりだった。錢仲聯「黃公度先生年譜」（注1）前掲のc・dに附録、以下『年譜』同治13（1874）年に「叔弟公望入州学。」とある。その其一に「有時隔屋語、亦復穴壁窺。（時に屋を隔てて語る有り、亦復た壁を^ま穴^{うが}ちて窺ふ。）」とあるが、『鈔本』はこの2句を「東頭伏案誦、西頭穴壁窺。（東頭 案に伏して誦し、西頭 壁を穴ちて窺ふ。）」に作り、「人境廬雜詩」其七と同様に陸機・陸雲兄弟の故事を用いる。
- 11) 「新嘉坡（シンガポール）雜詩十二首」「養疴雜詩」17首については、稿を改めて論じることにはしたい。
- 12) 注9）前掲書に掲げられた一海知義氏「西晉の詩人張協について」（『中國文學報』第七冊 1957）に、「とすれば、文選の同じ分類の一つである『詠懷』と、それ（「雜詩」を指す。…小川注）は全くかわらないジャンルであるといえようし、事実内容からいってもそうである。」との指摘がある。
- 13) 管見の及ぶ限りでは、皮日休の「江南書情、二十韻。寄秘閣韋校書貽之商洛宋先輩垂文二同年（江南書情、二十韻。秘閣韋校書貽之・商洛の宋先輩垂文の二同年に寄す。）」詩に「藥苞陳雨匱、詩草蠹雲函。（藥苞は雨匱に陳なり、詩草は雲函に^{かむ}蠹^{むしば}まる。）」、また「奉和魯望新夏東郊間泛（魯望〔陸龜蒙の字〕の『新夏 東郊に間泛す』に奉和す。）」詩にも「碧莎裳下携詩草、黃鶴樓中挂酒筭。（碧莎裳下 詩草を携へ、^{くわうべつ}黃鶴樓中〔鶴は箴の異体字。樓のある客船。黃鶴は隋の煬帝が江南に下った時の船の名。〕酒筭〔さけこし〕を挂く。」とあるのが早い例のようである。
- 14) 『四庫全書總目提要』集部・別集類存目三に明・趙漢撰『漸齋詩草』、同じく別集類存目四に明・徐學詩撰『石龍菴詩草』などに見えるのがその例である。